

Title	ガリアの英雄とナショナル・アイデンティティ : 第三共和政フランスの歴史教育と国民形成
Author(s)	渡辺, 和行
Citation	阪大法学. 2005, 55(3,4), p. 263-289
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54945
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ガリアの英雄とナシヨナル・アイデンティティ

——第三共和政フランスの歴史教育と国民形成——

渡 辺 和 行

一 起源神話とアイデンティティ

二〇〇三年一月下旬に、アンコールワット遺跡をめぐるカンボジアで暴動が起きた。事の発端は、「アンコールワットはタイのもの。カンボジアが盗んだ」とタイ人女優が発言したという噂が、カンボジア人のナシヨナリズムを刺激し、経済不況下でタイに対する日頃の鬱積していた不満が爆発したものであった。プノンペン市内のタイ大使館やタイ系企業やホテルなどが焼き討ちにあい、外交問題にまで発展した。また二〇〇一年二月には、ツタンカーメンの父を探るためにミイラのDNA鑑定を申請した日本の調査団に対して、エジプト政府から許可がおりないというニュースがあった。「古代ファラオがユダヤ人だと分かる可能性はないのか」という地元記者の発言に見られるように、そこにはイスラエルと対峙するエジプトの現在だけでなく、エジプトの起源神話の根底に関わる問題が胚胎していた。さらに二〇〇五年六月の『朝鮮中央通信』の報道（「世界で初めてロケットを作ったのは朝鮮〔高句麗〕」であり、ロケット兵器は「朝鮮民族の知恵と創造的才能、愛国心を示す貴重な歴史遺物だ」）にも、

国威発揚の意図を窺うことができる⁽¹⁾。これらの出来事は、史跡や遺跡や遺物が、今日においてもなおナショナルリズムやナショナル・アイデンティティを育む有効な道具であることを示している。フランソワ・フェレも述べるように、「あらゆる民族は、起源物語と偉大さの記念碑を必要とする」のである⁽²⁾。

このように、国民の起源神話や遺跡への関心は、邪馬台国論争と同じく近代にならないと生まれない現象である⁽³⁾。国民意識が未成立ないし未熟な古代や中世には、起源論争はありえなかった。国民の起源に関心が持たれなかったからである。国民の起源に広く関心が持たれるようになるのは、国民が優れて歴史的存在となった一九世紀以降のことである⁽⁴⁾。というのは、近代に誕生した国民を中心に過去が再編されたからだ。フランスとして例外ではない。一八三六年に、フレデリック・スーリエが『ラングドックの歴史小説』のなかで「フランス史が作られねばならない」と記したように、一九世紀初めにはフランス人は共有可能な「国民史」をいまだ持っていなかったが、一八三〇年代からジュール・ミシュレやアンリ・マルタンによるフランス史の執筆が始まり、一八三四年に「フランス史学会 (la Société de l'histoire de France)」が創設され、世紀末には「国民の物語」を持つことになる。一八九四年には、リセの歴史学教授シャラメが「わがフランス史を知らずして、どうして祖国にすべてを捧げえようか」と発言するまでになるのである⁽⁵⁾。こうした国民感情の発達には、国民の過去についての知識が根本的に重要であった⁽⁶⁾。歴史は国民感情を育み活性化させるのみならず、国民感情やナショナル・アイデンティティは国民史という花を咲かせる腐植土でもあった⁽⁷⁾。

しかも、ナショナル・アイデンティティは国際環境のなかで形成されるという逆説があることに注意せねばならない。フランスの場合、ナポレオン戦争末期にパリがプロイセン軍とコサック兵に占領されたことや、一八七〇年の普仏戦争でパリがプロイセン軍に包囲されたことなどが、国民意識の形成において与っていた。たとえば、ウ

ジエーヌ・シューは『民衆の秘密』（一八五〇）のなかで、ガリアの英雄ウエルキンゲトリクス（ヴェルサンジュトリクス）を「一〇〇の谷を支配する指導者」と称え、ローマ人によるガリア侵入との類比で一八一四〜一五年のプロイセン軍とコサック兵の占領を位置づけていた。⁽⁸⁾

このように、起源への関心が高まるのは近代のことであった。イポリット・テーヌが、『現代フランスの起源』第一巻を世に問うたのは一八七五年である。フロバールの『ブヴァールとベキュシエ』（一八八二）がケルト考古学やガリアの水盤に熱中したように、フランスにおいても祖先は誰かに関心が集まった。フランス人の祖先はフランク人なのか、ガリア人なのか。フランス史はいつから始まるのか、ガリア人の時代からか、それともフランク族の到来からか。ポミアンによると、ガリア人に関心が高まった時期は四つあるという。⁽⁹⁾ 第一に一五世紀末から一六世紀初め、第二に一六世紀後半、第三に一八世紀末から一九世紀初め、第四に一八二〇年代末から一九一四年までの八〇年間である。この第四期に真に国民形成が行われたのである。本稿は、この第四期、とりわけ第三共和政期の歴史教科書を取りあげて、ガリアの英雄に関してどのような歴史像が提示され、ナショナル・アイデンティティが構築されようとしたのかを検討するが、本論に入る前に、フランス史におけるガリアの発見やウエルキンゲトリクスの英雄化について整理しておきたい。

二 ガリアの雄鶏とウエルキンゲトリクス

「ドイツ復活の日にはガリアの雄鶏の雄たけびによって告げ知らされるであろう」⁽¹⁰⁾。このように、マルクスが『ヘーゲル法哲学批判序説』を結んだのは一八四三年末のパリであった。この文章が興味深いのは、『ドイツ・イデオロギー』（一八四六）に結実する初期マルクスの思想的展開という問題を越えて、「ガリアの雄鶏」がフランス

の表象として公認されていたことを、ドイツ人マルクスの一文が物語っているからである。ガリアの雄鶏（ガルス）の表象は中世にも存在したが、国家や民衆や国民の象徴として意識的に使用されるようになったのはフランス革命以降であり、一九世紀のロマン主義がこの表象を定着させるにいたった。シャトブリアンの『殉教者』（一八〇九）が「野蛮なガリア人」を浪漫的な英雄として叙述していたことや、ヴィクトル・ユゴーが二五歳のときに発表した『ヴァンドーム広場の円柱に捧げる頌歌』（二八二七）のなかで、「世界を目覚めさせるのはガリアの雄鶏だ」と詠っていたことを指摘しておこう。¹²⁾

ガリアの雄鶏は、ガリア時代の評価の高まりとパラレルな関係にあった。とりわけ、ガリアの英雄ウエルキンゲトリクスに関心が集まった。ガリアは、まずローマ人の目を通して論及された。カエサルは『ガリア戦記』のなかで、ガリアの指導者としてゲルゴウイア（ジェルゴヴィ）とアレシアで戦いを指揮し、捕虜になったウエルキンゲトリクスについて記している。『ガリア戦記』は、ガリア人の自由のために戦ったウエルキンゲトリクスが、アレシアでローマ軍に包囲されて降伏し、武器も取りあげられて堡壘に座るカエサルの前に引き出されたところで終わっており、その死については触れていない。¹³⁾このようにガリアは、カエサル以外にも、ティトゥス・リウィウスやタキトゥスといったローマの歴史家たちの文献と発掘史料から蘇ったのである。

一六世紀に、エチエンヌ・パキエが『フランス考』（一五六〇）のなかでガリアとフランスの絆に論及し、世紀末には「われらが祖先ガリア人」という言葉が初めて表れた。こうして、ガリアの記憶がヴァチカンと戦うフランス教会のガリカニズムに寄与し、アンリ四世が「ガリアの王」と呼ばれていたとはいえ、絶対王政と啓蒙の一八世紀はガリア人について沈黙していた。モンテスキューも『法的精神』のなかで、フランク人を「わが父祖ゲルマン人」と呼んでいる。しかしフランス革命期に、シエイエスが国民とは「ガリア人やローマ人の子孫」だと述べて風

向きが変化する。それゆえ、「一九世紀こそがガリア人を表舞台に連れ出した」と言ってよいだろう。¹⁴ フランス史においてガリアが発見されたのは一九世紀前半であり、世紀中葉にはガリア人はフランス史の一部となった。ミシュレの『フランス史』第一巻（二八三三）第一章には、ガリア人への共感が示されている。

ウエルキンゲトリクスと戦場のアレシアが神話化されるのも、一九世紀である。ウエルキンゲトリクスは、自由や祖国のための戦いを具現し、勇氣と名譽と自己犠牲の代名詞ともなったが、一八世紀末まで衆人の注目を集めなかった。彼はいまだ「国民的英雄」ではなく、その名が広く知られるのも一九世紀半ばのことである。一八五八年の『両世界評論』のなかで、ウエルキンゲトリクスは「最初のフランス人」（オマール公）と記述されることになる。それまで、多くの歴史家や年代記作家は、フランス人をガリア人の子孫ではなくフランク人の子孫であると見なし、フランク人の初期の王からフランス史を始めていた。王党的伝統に立つ歴史叙述では、「最初のフランス人」にして「最初のキリスト教徒の国王」はクロヴィスであった。オルレアン系の教科書も、フランス史をキリスト教とローマの遺産から始めていた。一八七〇年でも、「王政の眞の創始者であるクロヴィスからお話は始まる」と記す歴史教科書があった。また、王政復古下の一八一六年に、セーヌ川に架かるポン・ヌフは国民的栄光を表す一体の彫像で飾られたが、そのなかにウエルキンゲトリクスは含まれていなかった。王政のフランスとは無縁であったからである。しかし一八三〇年以後、ガリアの英雄の記念碑建立が提案されるようになる。¹⁵

こうした傾向を先取りしたのが、「一九世紀のケルト心酔者」と言われたアンリ・マルタンである。ミシュレが、ウエルキンゲトリクスを固有名詞としてではなくてガリアの武將を指す普通名詞として理解したのに対して、マルタンはその存在を証明し、さらに『フランス史』（一八三四）の冒頭で、「西ヨーロッパに最初に住んだ人々はガリア人であり、われわれの本当の祖先である」と述べ、近代のフランス人はさまざまな人種の混交によって作り出さ

れたが、「この混交のなかで支配的なのはガリア人の血だ」と記していた。それでも、一八六一年にマルタンが「ルーヴル美術館の国際色に富む陳列室には全世界の古美術品が展示されているが、わが祖父の古美術品は除かれている」と述べざるをえなかったように、ガリアの時代はフランス史の周縁的存在でしかなかった。「われらが祖先ガリア人」という表象は、近代の産物であった。古代ローマ人がイタリア人のアイデンティティと関わり、ゲルマン人がドイツ人のアイデンティティと関わったとき、「ローマ人とゲルマン人の狭間にいたガリア人」という歴史表象が作り出されたのである¹⁶⁾。

ガリアの歴史の「国民化」に貢献した歴史家は、アメデ・ティエリである。歴史家オーギュスタン・ティエリの弟のアメデ・ティエリは、アンリ・マルタンにも影響を与えた『ガリア人の歴史』（一八二八）のなかで、国民主義的なウエルキンゲトリクス像を提示していた。ウエルキンゲトリクスの子孫以外にわが父祖はいないと述べ、ウエルキンゲトリクスの党派は「国民党」と形容され、その軍隊は「国民的大義」や「自由の大義」のために戦った「国民軍」と位置づけられ、ウエルキンゲトリクスその人も「ガリア独立」のためにローマの侵略者と戦った国民的英雄として描かれた¹⁷⁾。言うまでもなく、実際のガリア人は近代的な国民意識や国民概念とは無縁であり、ナショナル・アイデンティティではなくて、エスニック・アイデンティティの次元にとどまっていた。

ナポレオン三世も、「国民の過去」を考古学的民族誌的に再構成することにおおいなる関心を抱いていた。彼は、民衆の支持を得るためにも、フランス国民の祖先がフランク族ではなくて、ガリア人ないしケルト人だということを公認し称えた。第二帝政が始まった一八五〇年代には、ガリアの要塞アレシアの場所をめぐって議論が戦わされていた。アレシアはディジョン近郊のアリス＝サント＝レーヌ (Alise-Sainte-Reine) 村なのか、あるいはブザンソン南方二五キロにあるアレーズ (Alaise) 村なのか。アレーズ村説の支持者には、古文書学院教授のジュール・



ウェルキンゲトリクス

出典：Désiré Blanchet, *Histoire nationale et notions sommaires d'histoire générale*, première année, Paris, 1888, p. 24.

され、一八六〇年代の発掘ではウェルキンゲトリクスの名が刻印された二枚の青銅コインと無銘の肖像金貨が見つかったことが、ガリア兵のイメージの定着に与っていた。こうして長髪で髭をはやしたガリア兵の像が造られ、ミレーのウェルキンゲトリクス像となり、

キシュラもいた¹⁸。一八五八年七月に、ナポレオン三世はガリア地誌委員会を設置し、学問的に決着をつけるためにも、一八六一年にアレシア（ア리즈村）を、翌年にはゲルゴウイアの発掘に私財を投じて、考古学上の史料を収集させた。六一年六月には発掘中のア리즈村を訪れてもいる。また、一八六七年には国立古代博物館をサン・ジェルマン・アン・ハレーの城にオープンさせている。皇帝が、彫刻家エメ・ミレーにウェルキンゲトリクス像の制作を依頼して、私費で購入したのも同様の考えによるだろう。ミレーは、皇帝の風貌をモデルにしてガリアの指導者を造形しており、その巨大な銅像は、一八六五年八月にデイジョン近郊のアレシアに建立された。高さ七メートルの台座の上に、胄をかぶらず、地面に突き刺した剣に両手をもたせかけた六・六メートルの立像が据えられた（図参照）。皇帝は台座にウェルキンゲトリクスの言葉を刻ませている。「団結したガリアから生まれるのは同じ心を持った活動的な民族^{ナチ}だけであり、そのガリアは世界に立ち向かうだろう¹⁹」。

このイメージが流布していく。民衆の心性にまでこの像が浸透するには、一九一〇年に発売されるタバコ「ゴロワーズ」を待たねばならない。⁽²⁰⁾

こうして、アレシアは「国民史の起点」の地位を獲得し、ガリア・ブームが生まれる。一八六四年にアカデミー・フランセーズがガリアの英雄に関する詩の賞を設け、一八六八年七月にアンリ・ド・ペーヌとエドモン・タルペーデッサブロンが新聞『ル・ゴローワ』（一万三〇〇〇部）を発刊し、一八六〇年代にはウエルキンゲトリクスを画題にした絵や石膏像がサロンに出展された。エールマンの絵やバルトルディの彫像などが代表的なものであり、クールベも「ウエルキンゲトリクスの櫂の木」（一八六四）という絵を描いている。しかしナポレオン三世が、『ユリウス・カエサル』の歴史（一八六五）の著者であることも忘れておこう。アレシア発掘の動機の一つは、カエサル伝の執筆にあったと言ってよいだろう。彼は、ウエルキンゲトリクスを称えつつも、ローマによる植民地化の恩恵をも主張し、「われわれの文明はローマ軍の勝利のおかげである」と記す人物でもあった。さらに、一八六八年八月一日デクレによってパリ一四区に新しい街路（アレシア通りとトルビアク通り）が誕生したが、ガリアの独立を象徴するアレシア通りは、フランク国王クロヴィスの戦勝地から取られたトルビアク通りと結ばれていた。ナポレオン三世の政治的リアリズムであるうか。しかし、「玉座と祭壇の同盟」が称えるクロヴィスは第三共和政の成立とともに影が薄くなり、それに代わって、詩や小説や戯曲のジャンルにおいてもウエルキンゲトリクス賛歌が大量に制作されるようになる。⁽²¹⁾

一八七〇年の敗北を体験したフランス人にとって、ガリアの英雄は何よりも「敗れたフランスの誇り」を表象し、それだけに共感を集めやすかった。一八七二年に、ジャンヌ・ダルクとウエルキンゲトリクスが手を握る立像「民族独立の殉教者たちへ」（エミール・シャトルース作）がサロンに出展され、一八七三年一月一日県令で、パ

リ一四区にヴェルサンジュエトリクス通りとジェルゴヴィ通りが生まれたところにも、そうした心性を窺うことができる。第三共和政期のフェリーの学校が、クロヴィスやフランク族に代えてウエルキングेटリクスとガリア人を登場させたが、一八八〇年頃までの初等教科書では、ガリア人はフランス史の外に追いやられており、フランク族によるガリア征服とクロヴィスの洗礼から国史は始まっていた。石工出身の政治家マルタン・ナドが、自分の家系は「偉大でたくましいガリア族に連なり、……ガリア人たちは常に共和政を欲していた」と一八九五年に記すには、こうした歴史教育の変化があった。また、ナドがガリア人の民衆性を強調したところに、フランク人を貴族と同一視する階級的視点を垣間見ることができる。²²⁾

「フランク人Ⅱ貴族、ガリア人Ⅱ民衆」という図式は、オーギュスタン・ティエリの『メロヴィング王朝史話』（一八四〇）所収の「フランス史考」（未訳）で出された二階級モデルであり、この図式が、普仏戦争の敗北後、共和政において政治的にも利用できる表象となった。ガリア人は農奴と農民の祖先であり、ガリアを侵略したフランク人は貴族の祖先であった。フランク人はプロイセン人と同一視され、対独復讐の文脈のなかで、いっそうガリア最頂が作り出されていく。またローマ人という表象は、ヴァチカンの介入を拒否する政教分離の戦いのなかで失墜していった。しかも紀元前のウエルキングेटリクスは、教会と共和国を対立させた争いとも無縁であり、まさに彼はコンセンサスを得られる人物、国民統合の象徴であった。

こうして「英雄の国民化」が進み、ウエルキングेटリクスが「最初の国民的英雄」となるや、「フランス・君主政・カトリック教会」というかつての聖なる三位一体は、「ガリア・国民・共和政」という世俗的で民主的な三位一体へと変化した。ウエルキングेटリクスは、国の統一のために努力した「最初のフランス人」と称された。共和派が、王政やカトリック教会の伝統とは無縁なガリアの英雄を称えたのに対して、一八八〇年代にカトリックはク

ロヴィスを称揚し、一八九六年に行われたクロヴィスの受洗一四〇〇年祭がそれに弾みをつけた。カトリックの教科書出版社マムは、『クロヴィス——フランスの揺りかご——』（二八九八）という伝記を出して「玉座と祭壇の同盟」を祝った。この本のなかで、「フランク族の息子であるフランス人よ、王妃クロチルドとクロヴィスのように、キリスト者たれ、偉大であれ」と呼びかけられた。ここにも一つのフランスが顔を覗かせているが、一八九〇年以降のカトリックの共和政への参加運動によって、ウエルキングゲトリクスに対して折衷的な見解が出されるようになる。ヴェルサイユにあるカトリック校の神父たちは、生徒のために書いた「ウエルキングゲトリクス」の脚本のなかで、「われわれは祖国という同じ関心しか持たない」と述べて、ウエルキングゲトリクス崇拜と愛国心を鼓舞するように求め、「最後のガリア人の墓はキリスト教の揺りかごであった」と記していた。つまり、ウエルキングゲトリクスは、クロヴィスの到来を用意する使命を帯びていたと主張された。「ウエルキングゲトリクスは、わが民族のキリストだ」という主張も現れたほどである。こうしてガリアの時代は、カトリックにとっていわばフランス史の「旧約聖書」の時代となったのである。⁽²³⁾

ただし、ウエルキングゲトリクスを賞賛し、カエサルを非難するという単純な問題ではなかった。多くの教科書は、ガリア人の生活と現在のフランスとを比較しつつ、「未開と文明」の二項図式で描き、そのコロラリーとしてフランスの植民地主義を「文明化の使命」によって正当化していた。

ローマ人のおかげでガリアが文明の段階に達したという考えは、すでにヴォルテールにも見られた。ヴォルテールは、「未開の」ガリアは、「開明的な民族に服従する必要があった」とか、「ガリア人はローマ人に敗れて幸せであった」と記した。ギゾーは「ローマ帝国の征服による専制的支配は、必要かつ有益な進歩であった」と語り、ラマルチーヌは、「カエサルの戦争に感謝せねばならない。それは、一つの民族を隷属させたが、人間の精神を解放

したのだ」と述べ、一九世紀ラルース事典の項目「ウエルキンゲトリクス」のなかでも、ローマの「征服は武力によるだけでなく、文明による征服でもあった」と評価された。こうした見解は、歴史家フュステル・ド・クーランジュなどのロマネリストによって強力に主張され、コレージュ・ド・フランスのラテン文学教授のガストン・ボワシエも、「私にはカエサルに向かって怒ることはできないし、祖先の敗北はそれほど嘆かねばならないものとは思われない」と述べていた。ナポレオン三世にも見られた、ローマの勝利がガリアにとって有益であったという主張は、第三共和政期に強まるのである。エルネスト・ラヴィスも一八八八年に出した書物のなかで、今日、ウエルキンゲトリクスの彫像造りに専念している者もいるが、ガリア人のウエルキンゲトリクスとわれわれとの間には、ゲルマン人アリオウイストウスとドイツ人ほども関係がなく、ウエルキンゲトリクスの敗北以後、ガリアはローマ人に征服され、ローマから言葉や制度や習俗を学んだと記していた。アクシオン・フランセーズ系の歴史家ジャック・バンヴィルも、ウエルキンゲトリクスが勝利していたなら、「それは不幸なことであった」と述べている。²⁴⁾

このように、ガリア神話がピークに達したのは第三共和政である。それには、普仏戦争の敗北が大きく作用している。一八八二年に、「最近のかつてない不幸な出来事の後、われわれは、ガリア人の方へと自ら進んで関心を向けた。ガリア人はフランス国民にとって、一種の崇拜的となり、国民的名誉の守護神とさえなった」と述べられていた。²⁵⁾カエサルはモルトケと比較され、アレシアの戦いはスタンの敗戦と同一視された。「野蛮な」ゲルマン・ドイツとの対比で、フランスの独自性やフランスのアイデンティティを探究する必要性に迫られ、国民の起源をフランス以前の時代に求めるムードが高まったのである。

とはいえ、ウエルキンゲトリクスやガリア伝説が力を持ったのは初等教育であり、ラテン語を重視する中等教育では、カエサルやタキトゥスやプルタークの注釈が授業の中心であり続け、高等教育でもガリア人の徳や制度につ

いては懐疑的であつた。⁽²⁶⁾ マレの中等第六学級(一一―一二歳)用の古代史の教科書は、古典古代に紙幅が費やされ、カエサルによる「ガリア征服」の一齣としてガリアが登場するだけであり、「カエサルの勝因」を戦術や規律や科学に求めていた。ウエルキンゲトリクスは、「独立の英雄」とか「祖国ガリアという意識を持った熱烈な愛国者」として描かれるが、その彼は、「勝つためには優柔不断な連中に恐怖を与えて従わせた」人物でもあつた。このように中等の教科書では、ウエルキンゲトリクスの残忍さも指摘された。セニヨボスのテキストでは、「ウエルキンゲトリクスは、反逆者を生きのまま焼き殺し、裏切り者の耳をそぎ落とし、目をくり抜くことで規律を打ち立てた」とか、ガリア人は「文学、芸術、科学といった文明の本質に無知」であり、「ローマ人は諸民族を服従させつつ多大な恩恵を与えた」と記されたのである。⁽²⁷⁾

以上のようにガリアに対する評価の推移や、教育課程による力点の相違を念頭に置いた上で、第二共和政期の初等用歴史教科書を読んでみよう。

三 ラヴィスとガリアの英雄

真つ先に取りあげるのは、エルネスト・ラヴィスの教科書である。別稿でも論じたように、ラヴィスは教科書執筆者として著名な歴史家であり、「国民の教師」を目指した彼の教科書は「共和国の福音書」とまで言われた。⁽²⁸⁾ まず、小学校低学年向けの『新準備級フランス史』(第九四版、一九〇二)の「ウエルキンゲトリクス」の物語から、ガリアの英雄の描写を見ておこう。⁽²⁹⁾

オーヴェルニュに生まれたウエルキンゲトリクスは、勇敢で威厳に満ちていたがゆえにガリア人の首領になった。カエサルに雄々しく抵抗したが、アレシアでローマ軍に包囲されて餓死者が出るにいたり、ウエルキンゲトリクス

は、兵士たちを救うために、美しい鎧をまとい駿馬に跨って町を出てカエサルに降伏し、その足下に武器を投げ出し虜囚の身となった。カエサルは、ガリア人の首領に鎖をつけてローマまで連れて行き、六年間獄に繋いだあげく、「ガリアを守った英雄を滅ぼそうとして残虐行為に及んだ」(p. 5)。ここでは、ウエルキンゲトリクスの指導者としての資質と勇敢で犠牲的な精神が称えられている。挿絵「カエサルに降伏したウエルキンゲトリクス」は、馬に跨って腕を組んで毅然とした態度でカエサルと対面している場面を描き、惨めな捕虜のイメージからはほど遠い構図である。設問には、ウエルキンゲトリクスの犠牲的行為について考えさせる問が置かれた。

本文では、紀元前四世紀以降のガリアの風土や景観、ガリア人の宗教や死生観が述べられた。ガリアは、地理的には今日のフランスより広いが、未開で森におおわれ、狼や熊や野牛が放浪していた。森に隠れるようにして村があり、ガリア人は恣もない粗末な木造の家に住んでいた。ガリア人は、ドルイドと呼ばれる祭司のもとに自然崇拜や靈魂の不滅を信仰する異教徒であった。彼らはしばしば争い合い、時には外国を征服したこともあった。紀元前三九〇年にはローマを脅かすほどの勢いであった。しかしローマは帝都となり、ローマ人はガリアを攻撃してきた。こうして「有名なローマの將軍カエサルは紀元前五八〜五〇年の間に全ガリアを征服した。わが国を勇敢に守ったウエルキンゲトリクスは、征服者に降伏をよぎなくされた。四〇〇年以上の間、ガリアはローマ人に服従してきた。まさにこの時、キリスト教の福音がガリア人に説かれた。キリスト教の国教化とともにガリアにもキリスト教が打ち立てられた」(p. 36)。第九四版ではローマ文明の恩恵については触れられていないが、「ガリアのキリスト教への改宗」に紙幅が費やされており、クロヴィス以前のキリスト教化の強調は、王党的歴史叙述に対する批判になっている。

ラヴィスの教科書をさらに三冊取りあげよう。九〜一一歳の生徒用の『中級フランス史Ⅰ』(一九〇四、六六八版)

と『中級フランス史』（一九二二、一七版）、それに二一―二三歳の生徒用の『上級フランス史Ⅱ』（二八九七、五四版）の三冊である。³⁰

ラヴィス中級（一九〇四）では、一四八三年以前の時代は非常に簡略化されており、ウエルキンゲトリクスも一行で片づけられ、挿絵もミレーの立像が小さく載せられただけであった。フランス史の「最初の英雄」という位置づけに、地理的アイデンティティと歴史的アイデンティティが結びつけられている様を窺うことができる。それでも、ガリア人は未開で分裂し、勇敢だが規律を欠いており、ローマの征服によって文明の恩恵を受けたことが記される。第一編のまとめでは「祖国」が強調された。分裂して争い合っていた「ガリアは祖国ではない。なぜなら、祖国とはすべての子どもたちが互いに愛し合うはずの国だから」とゴチック体で強調された（pp. 57, 22-23）。ドレフェス事件の直後だけに、統一を重視するラヴィスにとって、国内の分裂や抗争は祖国に対する大罪であった。

中級一九二二年版では、ウエルキンゲトリクスに一頁が当てられたが挿絵はない。ガリアの地図が載せられ、今のフランスより広がったことが説明された。フランスの時間的連続性を伝えると同時に、領域にも目配りさせる構成になっている。ラヴィスは冒頭で、二〇〇〇年前のガリア人たちは一〇〇ほどの部族に別れて、しばしば争い合っていたことを述べて、「ガリアは祖国ではない」と一九〇四年版と同じ言葉を書き記した。ガリア人は勇敢であるが、命令されるのを好まず、それゆえしばしば戦いに敗れた。負け戦と分かるや、すぐに戦意を喪失するという欠点も持っていた。「兵士は、勇敢であるだけでは不十分であり、指導者の命令に服さねばならない」と注釈がなされた。そして、ローマ軍の征服に直面して、ウエルキンゲトリクスは「外国人に自国が占領されるのは恥ずべきことだとガリア人に理解させた」ことを述べる。知将カエサルにアレシアで攻囲され、「ウエルキンゲトリクスは、敵に対して自国を守ったがゆえに死んだ。……よき兵士の義務を果たすことで名誉を救うことはできる。フラ

ンスのすべての子どもたちは、ウエルキンゲトリクスを記憶にとどめ愛すべきである」(全文イタリック)と述べられた。第一次大戦で強まったナショナルリズムの余韻が感じ取られる文章である。ローマの支配については、外国人に服従することを「最大の不幸」としつつも、ローマ人から建築、数学、ラテン語、キリスト教など多くのことを学んだことが記された。この単元のまとめでは、「国民の本質はガリア人のままである。ガリア人はわが祖先である」と断定された(pp. 5, 8-13, 26)。

ラヴィス上級(一八九七)でも、未開のガリアとローマの文明という枠組みで、短い本文と物語が置かれた。勇敢なウエルキンゲトリクスと不寛容なカエサルという構図のもとに、アレシアの戦いが叙述されたが挿絵はない。ガリア人は勇敢であったが分裂しており、カエサルに敗れた。そのとき若き指導者ウエルキンゲトリクスがガリア軍を統率し、「わが国を守るために勇猛果敢に戦った。それゆえフランスの子どもたちは、彼の思い出を慈しむべきだ」とラヴィスは記す(pp. 31, 36)。祖国の防衛者という位置づけである。

以上のようなラヴィスの教科書は、共和派の教科書の祖型となった。それでは、ラヴィスの教科書を原型として他の教科書と比較しよう。

四 教科書のなかのウエルキンゲトリクス

本稿で取りあげた二冊の教科書の内訳は、一八七〇年代に執筆されたものが四冊、第一次教科書ブームの一八八〇年代に執筆されたものが八冊、第二次教科書ブームの世紀転換期に執筆されたものが八冊、その他二冊である。本節で取りあげる教科書は、ラヴィスより共和主義の主張が鮮明なゴーチエとデシャンの初級と中級、穩健共和派のクロード・オジェとマキシム・プチの準備級、初等教育の名誉視学総監セニエットの初級、リセ・シャルルマー

ニユの元教授デジレ・ブランシエの中級と『上級世界史』、リセ・サンルイの歴史教授アンドレ・グレゴワールの上級、リセ・デカルトの歴史教授ピジョノーの『フランス小史』、元ポワチエ大学区長マジヤンとリセ・フォンターヌの歴史教授クレゴワールの『フランス史』、師範学校教授デュクレイの『基礎フランス史』、および中等教育用の教科書である。⁽³¹⁾ これら公立学校で使用されたもの以外に、カトリックの修道士や教授たちが執筆して私立学校で用いられた教科書や年表の記述からも特色を窺うことができる。名誉視学総監で歴史教授のフェリッククス・アンサールの『フランス小史』、リセ・ルイール・グラン教授キュスターヴ・ユボーの上級、ヴォーチエ・ダリュヴァンの世界史などがその例である。⁽³²⁾ それでは、これらの教科書を課程別・出版年順に読んでみよう。

まず一八七〇年代に出版された教科書を検討しよう。ピジョノーは、独立期ガリアの地誌やガリア人の容貌、信仰などに触れた後で、ウエルキンゲトリクスとアレシアの戦いに三頁を当てたが、英雄譚にはしていない。ウエルキンゲトリクスの勇敢さを記し、戦闘の経緯が活写されたが、挿絵はない。ラヴィス本と大きく異なるのは、カエサルがガリアの指導者を引き渡すように求め、徹底抗戦派のウエルキンゲトリクスが自己犠牲的行為で捕虜になったという点である。「自由を失いはしたが、ガリアは勝者から文明を受け取った」という点はラヴィスと同じだ (pp. 10-12)。マジヤン・グレゴワール本は、「最初の王クロヴィス」から第一章が始まり、ガリアの時代は序章で簡単に扱われた。しかも地誌に多くが割かれ、ガリアはローマ文明の均霑に与ったことが語られた。「ガリア独立の擁護者」ウエルキンゲトリクスについては、英雄的行為と同時に「民族の自由を守るために武装しない者には手首の切断」などの仕打ちが加えられたことも述べられた (p. XII)。挿絵もなく、ガリアの時代の扱いが軽いのは、一八七〇年代の出版だからであろうか。

著名な副読本『二人の子どものフランス巡歴』は、「われらが祖先ガリア人」と明示し、「わが祖国ガリアでその

時代に起きた話は感動的だ」として、ウエルキングゲトリクスの戦いを物語る。ウエルキングゲトリクスを、カエサルと勇敢に戦い祖国からローマ軍を追い出そうと決意した人物として描く点で他の教科書と変わりが無いが、アレシアの包囲戦の説明のなかで、普仏戦争時にパリがプロイセン軍に包囲され、二人の子どもの故郷ローレーヌの町が侵略されたことに触れて、過去と現在を往還することで対独復讐心を維持しようという点に特徴を窺うことができる。また、カエサルがウエルキングゲトリクスの引き渡しを求めていたことも記された。挿絵にはミレーの立像が使われつつも (pp. 134-138)。

次に初級教科書を覗いてみよう。セニエットは、物語のなかで「勇敢な戦士」ウエルキングゲトリクスに言及した。アレシアという地名は出ていないが、ローマ軍に包囲されて食糧が底をつき、餓死者を出すのを避けるために単独でカエサルに降伏し殺されたことが記された。挿絵は二枚あり、一枚はミレーの立像、他の一枚はカエサルのもとに駆けつけた馬上のウエルキングゲトリクスであり、勝者と敗者ではなくて対等の立場を感じさせる構図である (pp. 9, 13)。オジエとプチの準備級には、本文でガリア人が互いに争いあい、敗れた部族がローマ軍に救援を求めたことがまず述べられた。ついで、ウエルキングゲトリクスは勇敢に戦ったが、戦争技術でもローマ軍が勝っていたことも触れられた。「読み物」で語られたアレシアの戦いについても、情に厚いウエルキングゲトリクスと非情なカエサルの仕打ちが対照的に描かれるが、抑制のきいた文章で綴られた。挿絵は二枚あり、カエサルのもとへ降伏しに行つたウエルキングゲトリクスの到着場面とアレシアの戦いの戦闘シーンが描かれた。とくに前者の挿絵では、馬にまたがり堂々とした体躯のウエルキングゲトリクスがカエサルと睨み合っている場面が描かれた (pp. 57)。

ゴーチエとデシャンの初級を見てみよう。ラヴィスの準備級より戦いが詳しい。ガリア人が好戦的な民族であったことを指摘した上で、ウエルキングゲトリクスに二頁があてられた。クレルモン＝フェラン近郊ゲルゴウエアに生

まれたウエルキンゲトリクスは、祖国の独立のためにカエサルと英雄的に戦った。しかし、ガリア人は絶えず内輪もめをして団結を欠いていたので敗れた。「力の素は団結だ」と注釈された。ウエルキンゲトリクスの呼びかけに応じて、全ガリア軍がローマ軍と戦い、ゲルゴウニアでは勝利したがアレシアでローマ軍に包囲されて敗れた。ウエルキンゲトリクスは、ローマでの六年におよぶ虜囚生活の後に首を刎ねられた。「ガリアの英雄ウエルキンゲトリクス」という読み物が、ラヴィスの物語と同様、アレシアの戦いにおける勇敢な英雄の姿を描く。自己犠牲的な行為が徒勞に終わり、ローマで殺害されたことを述べて、著者たちは「わが史上初の英雄は非業の死をとげた」と結んだ。挿絵は、ミレーの立像と馬から降りて腕組みをし、カエサルと向き合う威厳に満ちたウエルキンゲトリクスが描かれている。設問では、なぜ敗れたウエルキンゲトリクスは逃げ隠れしないでカエサルに降伏したのか、勝者と敗者についてどう思うか、なぜ君はウエルキンゲトリクスが好きなのか、なぜ君はカエサルを好まないのかなどが尋ねられた (pp. 2, 4-5)。ウエルキンゲトリクスの道德的優位さの解答を期待しており、愛国的な起源神話にふさわしい質問である。

次に中級の教科書である。デュクドレイ中級は他の教科書より詳しいが挿絵はない。勇敢だが、ガリア人はローマ人より科学的に劣り、命令や規律なしに戦い、互いに嫉妬しあって部族の領地の防衛しか考えなかったという欠点がまず指摘された。それゆえ「祖国ガリア」はいまだ存在せず、「祖国の感情」が覚醒したときはすでに遅かった。物語でアレシアの戦いが詳述され、「国民は、団結なくして独立を維持することはできない。科学と規律によってのみ戦争に勝つことができる」と総括され、「独立戦争の英雄」の「ウエルキンゲトリクスは、献身と愛国心の偉大な模範を示した」と締めくくられた³³ (pp. 4-7)。

ブランシエ中級は、ガリアの地理やガリア人の習俗や遠征に触れた後で、二頁をウエルキンゲトリクスに割いた。

その評価は「ガリアの英雄的な指導者ウエルキングゲトリクスは、ガリアの独立を守ろうとした」に尽きるだろう。勇敢なガリア人は規律に欠け、指導者に従わず、反目しあい、互いに妬みあったことも指摘された。「アレシアの包围」が物語と読み物の両方で取りあげられている。ブランシエの淡々とした描写を補ったのが、ギゾーの包围戦の引用である。ブランシエは、「恩を感じたフランスがガリアの守護者の立像を建立した」ことにも触れ、ミレーの立像を掲載した。アレシアの敗北以後、「ガリアはローマ人によって賢明に統治された」、「ガリアは独立を失った代わりに文明を受けとった」というのが著者の評価である (pp. 5-19)。

ゴーチエとデシャンの中級はどうだろう。地理的には現在のフランスより広大であった未開のガリアは、ローマ人によって文明化したことが述べられた。中級も「われらが祖先ガリア人」が戦士民族であったことに触れて、このテーマに約一頁をあてて述べる。本文のなかで、「愛国的な首領ウエルキングゲトリクスの声に呼応してガリア人は一斉蜂起した」が、アレシアの戦いで敗れ、ウエルキングゲトリクスは殺害されたことが記された。「読み物」では、カエサルよりも「偉大なウエルキングゲトリクス」について、同胞の命を守るために自ら犠牲となり、「祖国の独立を守るために戦った」「偉大な祖先」について語るのである。設問には、英雄の役割やローマ支配の帰結について考えさせる問いが置かれた。挿絵は、初級と同様の対面図が収められている (pp. 23)。

グレゴワール上級は、「独立期ガリア」の項目で淡々と叙述したにすぎず、挿絵もない。「分裂していたがゆえに弱体で敗れたガリアが、団結の必要性を理解したのは遅かった。……ウエルキングゲトリクスはアレシアの砦に閉じこめられ、死にも狂いの抵抗の後、降伏せざるをえなかった」。「ウエルキングゲトリクスの努力と英雄的なアレシアの防衛戦にもかかわらず、ガリアは八年で征服された」(pp. 79, 99)。ブランシエ『上級世界史』は、カエサルが、抗争し合っているガリア諸部族を各個撃破して征服していった様を述べ、ガリアの独立堅持と愛国心に由来す

る外国への憎悪から決起したウエルキングेटリクスの伝記を二頁挿入していた。内容的にはラヴィスと重なっているが、戦争中は無慈悲なカエサルが戦勝後は寛大になったことが記された。挿絵はミレーの立像である⁽³⁴⁾ (pp. 110-114)。

最後にカトリック系の教科書を読んでみよう。四冊ともに挿絵はなく、ユボーを除いてガリアの扱いは軽い。キリスト教修道士の年表は、「カエサルのガリア征服」の項で説明した。ウエルキングेटリクスの声に依って全ガリアは決起し、最初はカエサル軍を撃破したがマコンの近くで敗北を喫した。そしてアレシアで包囲され、部下たちを助けるために、ウエルキングेटリクスは単身カエサルのもとに赴いて囚われの身となった。しかしカエサルは、ウエルキングेटリクスを鎖につないでローマまで引き連れ、戦利品として利用したあげくに殺害した。評価的な文言もなく、淡々とした記述であり、クロヴィスの戦争や改宗のエピソードが詳述されたのと対照的である (pp. 15-17, 18)。国王列伝のようなアンサールの本は、ウエルキングेटリクスには触れることなく、カエサルとの「八年間の激しい抵抗の後、ガリアはローマの属州になった」と記したのみである (p. 6)。

テキストの半分近い二〇〇頁を紀元前の聖史に費やしているダリュヴァンの世界史は、ウエルキングेटリクスはもとよりカエサルのガリア遠征についてもほとんど触れておらず (pp. 207-208)。ユボーは、「カエサルによるガリア征服」の項目でウエルキングेटリクスやゲルゴウシアとアレシアの戦いを詳述した。ウエルキングेटリクスは、独立への愛と外国への憎しみという共通の感情のなかでガリア人に団結を訴えたが、カエサルに敗れた。カエサルとの対面の場面では、誇り高い態度のウエルキングेटリクスと罵詈雑言を浴びせるカエサルが対照的に描かれた。ウエルキングेटリクスの獄死に触れた後で、敗者を哀れみ不幸な人を敬うようにという使徒ペテロとパウロの教えは、まだ発せられていなかったと述べたところにカトリック色を窺うことができる。それでも「ローマは、ガリア

人に独立と引き替えに文明の恩恵をもたらした」と結論された (pp. 6-10)。ユボアの叙述は、祖国崇拜や文明化を説く点で共和派の教科書とほとんど差がない。

五 英雄とナショナル・アイデンティティ

国民的な英雄はなにも勝者に限らない。ジャンヌ・ダルクに典型的なように、敗者や殉教者も英雄になりうるが、敗北の前に勝利があれば劇的効果はさらに高まる。そうした敗北は、勝利よりも「想像の共同体」を構築しやすいからである。本稿で取りあげたウエルキングेटリクスも、そのような英雄であり、ゲルゴウアの戦いに勝利した彼は、アレシアで敗北し、カエサルによって殺害され殉教者となった。敗者ではあれ、侵略者に対して抵抗し、祖国に殉じた国民統一の象徴、高潔で榮譽に包まれた人物というウエルキングेटリクス像が、教科書などを通して広められた。しかも「対独復讐」が政治課題であった前期第三共和政においては、ローマ軍と戦うガリア人はドイツ帝国と戦うフランスと同一視され、ナショナル・アイデンティティの構築に役立てられたのである。

とはいえ、ガリアの重視は両義的であった。第三共和政期の歴史教科書の多くは、フランス史の始原をガリアに求め、ウエルキングेटリクスを、独立の擁護者、祖国の化身、フランスの創始者として描くが、他方でガリアは未開の地であり、敗北が幸福な結末をもたらしたと結論された。こうした主張は、人文主義教育の牙城である中等教育ではかなり強かった。それだけに、ガリアは独自の文化を持っていたと主張する論者たちが、一八八二年に、中等学校の「教授たちは、わが父祖の民族独立の破壊者」たる「カエサルを称揚し賛美することを目指している」と非難したのである。修道会系の教科書にも、カエサルの残忍性に触れ、「わが父祖も自分たちの文明を持っていた」のに、突然その発達が止められたのだと記すものもあった³⁶⁾。こうしたガリア・ナショナルイズムは、形を変えつつも

今日まで続き、ウエルキンゲトリクスの英雄視と、ガリアに「フランスのアイデンティティ」を求める主張をあと押しすることになる。⁽³⁶⁾

ともあれ、第三共和政期の歴史教育の効果を、一九四八年と一九八〇年に同じ質問項目で行われた歴史アンケートに窺うことができる。アンケートの分析によると、ウエルキンゲトリクスは異論のない英雄にランクされており、「フランス史の英雄」として不動の地位を確立していた。ガリアの英雄が支持されたのは、第二次大戦直後はレジスタンスの影響下で、ドゴールがウエルキンゲトリクスを「わが種族の最初の抵抗者」と賞賛し、一九四七年の道徳の初等教科書のなかでも「レジスタンスの最初の英雄」と位置づけられていたこと、一九八〇年には『アステリクス』の人気によるところが大きいだろう。第三共和政が誕生して一世紀の間に、ガリアの英雄はフランス社会にしっかりと根づいたのである。こうした趨勢は、二〇〇四年に出版された『フランス史を作った一〇〇人』にも表れている。二人の著者は、一〇〇人でフランス史のパノラマを提示することは「賭に近い行為」であることを認めつつも、国民の記憶作りに寄与した人物の最初にウエルキンゲトリクスを取りあげた。その理由として、古代ガリアという、いまだフランスが存在していない時代の人物が、一九世紀以降に重大な役割を演じたことを挙げている。⁽³⁷⁾

このような人物フランス史は、英雄崇拜や英雄史観に荷担する危険性もあるだろう。時あたかもフランスは、一九八七年にユーグ・カペーの即位ミレニアムを祝い、一九八九にはフランス革命二〇〇周年を祝った。また一九九四年に国立古代博物館で、一九世紀以降の発掘調査の「最初の総決算」として「ウエルキンゲトリクスとアレシア」展が開かれ、⁽³⁸⁾一九九六年には、クロヴィスの受洗一五〇〇年祭があった。フランスは、まさに「コメモラシオンの時代」に突入したかの感がある。ちょうどそれは、フランスに文化ナショナリズムが強まる時期と符合していた。しかし今日、多文化主義が浸透するなかで、フランス生まれのアフリカ人の世代にフランス史や黒人の歴史を

いかに教えるのかを考察した書物、『歴史教育と文化的多様性——わが祖先はガリア人にあらず』⁽³⁹⁾が出版されたところに、二二世紀のガリア人とフランスの新しい関係が示されている。

- (1) 『朝日新聞』二〇〇三年一月三十一日、二〇〇〇年二月十八日、二〇〇五年六月三日。
- (2) François Furet, "De l'histoire-récit à l'histoire-problème", *Diogenes*, no. 89, 1975, p. 115. フュレは、起源物語と記念碑は「同時に民族の未来を保障すべき」と記す。
- (3) 小路田泰直『邪馬台国』と日本人』平凡社新書、二〇〇一年。小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社、一九九五年。
- (4) Suzanne Citron, *Le mythe national, l'histoire de France en question*, Paris, 1987, p. 9. Cf., David A. Bell, *The Cult of the Nation in France 1680-1800*, Cambridge, 2001; Bernard Cottret dir., *Du patriotisme aux nationalismes 1700-1848*, Paris, 2002.
- (5) 以上、André Simon, *Vercingétorix et l'idéologie française*, Paris, 1989, pp. 28, 97; Anne-Marie Thiesse, *La création des identités nationales*, Paris, 1999, p. 131. 前川貞次郎『フランス革命史研究』創文社、一九五六年、七二頁。
- (6) Bernard Guenée, "Les Grandes chroniques de France", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, II La Nation, t. 1, Paris, 1986, p. 211.
- (7) Philippe Contamine, "Introduction", in Yves-Marie Berce et Philippe Contamine eds., *Histoires de France, Historiens de la France*, Paris, 1994, p. 11.
- (8) 以上、Simon, *op. cit.*, pp. 27-28, 37-40; Thiesse, *op. cit.*, pp. 11-12.
- (9) クシシトフ・ボミアン(上垣豊訳)「フランク人とガリア人」ビエール・ノラ編(谷川稔監訳)『記憶の場Ⅰ』岩波書店、二〇〇二年、一一〇頁。
- (10) マルクス(城塚登訳)『ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫、一九七五年版、九六頁。
- (11) オーギュスタン・テイエリは、『殉教者』を読んだ「感激の一瞬が、おそらく私の天職を決める上での決定的な一瞬であった」と述べて、「わが国の歴史の根本であり定式であった」王位や君主政体の歴史を越えたシャトーブリアンの歴

史叙述を称えている。オーギュスタン・テイエリ（小島輝正訳）『メロヴィング王朝史話』（上）岩波文庫、一九九二年、一三二―一三五頁。

(2) Michel Pastoureau, "Le coq gaulois", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, III Les Frances, t. 3, Paris, 1992, pp. 520-526; Paul-Marie Duval, *Pourquoi «Nos ancêtres les Gaulois»*, Paris, 1982, pp. 12-13.

(3) カエサル（近山金次訳）『ガリア戦記』岩波文庫、一九八八年版、二八三頁。

(4) 以上 Corrado Vivanti, "Les recherches de la France d'Étienne Pasquier", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, II La Nation, t. 1, Paris, 1986, p. 226; Paul Boulelier, "Étienne Pasquier et l'Histoire de France au XVI^e siècle", in Berce et Contamine eds., *op. cit.*; Mona Ozouf, *L'école de la France*, Paris, 1984, pp. 344-347; Danièle et Yves Roman, *La Gaule et ses mythes historiques*, Paris, 1999, pp. 169-170; Edmond Marc Lipiansky, *L'identité française*, La Garenne-Colombes, 1991, pp. 170-171. ホンテヌキュー（根岸国孝訳）『法』の精神』河出書房新社、一九七四年、一〇六頁。シハイエヌ（大岩誠訳）『第三階級は何か』岩波文庫、一九七二年版、三二頁。

(5) 以上 Simon, *op. cit.*, pp. 21, 24, 29, 41-42, 49; Christian Amalvi, *De l'art et la manière d'accueillir les héros de l'histoire de France*, Paris, 1988, p. 75; Olivier Buchsenschutz et Alain Schnapp, "Alésia", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, III Les Frances, t. 3, Paris, 1992, pp. 305-306; Christian Croisille, "Michelet et les Gaulois ou les séductions de la patrie celtique", in Paul Viallaneix et Jean Ehard dir., *Nos ancêtres les Gaulois*, Clermon-Ferrand, 1982, p. 213; Alice Gerard, "La vision de la défaire gauloise dans l'enseignement secondaire", in *Ibid.*, p. 358.

(6) 以上の引用は Remi Mallet, "Henri Martin et les Gaulois", in Viallaneix et Ehard dir., *op. cit.*, p. 235; Citron, *op. cit.*, p. 148. 以下マン、前掲論文、七七、八二、八七、一〇四頁。

(7) Claudine Lacoche, "Les Gaulois d'Amédée Thierry", in Viallaneix et Ehard dir., *op. cit.*, pp. 203-209; Simon, *op. cit.*, p. 28. 以下マン、前掲論文、一〇一―一〇三頁。

(8) マノース村誌の古史論より "Le Président Clerc, *Étude complète sur Alaise*, *Alaise n'est pas l'Alésia de César*, Besançon, 1860.

(9) 以上 Buchsenschutz et Schnapp, *op. cit.*, pp. 273, 285, 292-295; Athena S. Leoussi, *Nationalism and Classicism*, the

- Classical Body as National Symbol in Nineteenth-Century England and France*, London, 1998, pp. 181-182; Roger Facon et Jean-Marie Parent, *Vercingétorix et les mystères gaulois*, Paris, 1983, p. 12; Jean Tulard dir., *Dictionnaire du Second Empire*, Paris, 1995, pp. 24-27.
- (21) Buchsenschutz et Schnapp, *op. cit.*, pp. 281, 287; Musée des antiquités nationales, *Vercingétorix et Alsia*, Paris, 1994, pp. 205-209. 原註『氏族起源』の精神史』岩波書店 二〇〇三年 一八三—一八四頁。
- (22) Simon, *op. cit.*, pp. 43-44, 49, 57; Claude Bellanger, Jacques Godehot, Pierre Guiral et al., dir., *Histoire générale de la presse française*, t. 2, Paris, 1969, pp. 351, 356.
- (23) Amalvi, *op. cit.*, p. 53; Simon, *op. cit.*, p. 64; *Vercingétorix et Alsia*, pp. 369-370. プルタン・ナム(喜安朗訳)『岩波文庫』岩波書店 一九九七年 一四—一五頁。
- (24) Daniel Fabre, “L’atelier des héros”, in P. Centlivres, D. Fabre, F. Zonabend dir., *La fabrique des héros*, Paris, 1998, p. 271; Simon, *op. cit.*, pp. 103-104; Amalvi, *op. cit.*, pp. 59, 75-78; Ernest Bosc et L. Bonnemère, *Histoire nationale des gaulois sous Vercingétorix*, Paris, 1882, p. 454.
- (25) Simon, *op. cit.*, p. 102; Amalvi, *op. cit.*, pp. 61-64; *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, t. 15, Paris, 1876, pp. 894-895; Claude Nicolet, *La fabrique d’une nation, la France entre Rome et les Germains*, Paris, 2003, pp. 278-279. 岩波文庫『前掲論文』一〇八—一一頁。
- (26) Bosc et Bonnemère, *op. cit.*, p. VIII.
- (27) Christian Amalvi, “Vercingétorix dans l’enseignement primaire 1830-1940”, in Viallaneix et Ehard dir., *op. cit.*; Paul Gerbod, “L’enseignement supérieur français à la découverte des Gaulois”, in *Ibid.*; Gerard, *op. cit.*; M. Martin Guiney, *Teaching the Cult of Literature in the French Third Republic*, New York, 2004, Part III; Ozouf, *op. cit.*, p. 347.
- (28) Albert Malet, *Cours complet d’histoire, l’antiquité*, 6^e ed., Paris, 1908, pp. 373-374; Gerard, *op. cit.*, pp. 360-361, 363. 「重罪は火で凡ゆる苦しめで殺し、軽い罪なら耳を落したり片目をへりぬらして本国へ帰した」と、カエサルもウェルキンゲトリクスの所業に触れている(『ガリア戦記』前掲 二二二頁)。
- (29) 渡辺和行「英雄とナショナル・アイデンティティ」望田幸男・橋本伸也編『ネイションとナショナリズムの教育社会

- 史』昭和堂、二〇〇四年。渡辺和行「義務の共和国」服部春彦・谷川稔編『フランス史からの問い』山川出版社、二〇〇〇年。ビエール・ノラ（拙訳）「ラヴィス 国民の教師」ノラ編（谷川稔監訳）『記憶の場々』岩波書店、二〇〇三年。
- (22) Ernest Lavisse, *La nouvelle année préparatoire d'histoire de France*, 94^e éd., Paris, 1902. 教科書からの引用は本文中にビエールの綴や記号を加へ。
- (23) Ernest Lavisse, *La première année d'histoire de France*, cours moyen, 66^e éd., Paris, 1904; E. Lavisse, *Histoire de France*, cours moyen, 1^{re} éd., Paris, 1921; E. Lavisse, *La nouvelle 2^e année d'histoire de France*, cours supérieur, 54^e éd., Paris, 1897.
- (24) Gauthier et Deschamps, *Cours élémentaire d'histoire de France*, Paris, s.d., 1907?; Gauthier et Deschamps, *Cours moyen d'histoire de France*, Paris, 1906; Claude Augé et Maxime Petit, *Livre préparatoire d'histoire de France*, 54^e éd., Paris, s.d., 1900?; A. Seignette, *Histoire de France*, cours élémentaire, nouvelle édition, Paris, s.d., 1897?; Desiré Blanchet, *Histoire de France*, cours moyen, 104^e éd., Paris, 1890; Desiré Blanchet, *Histoire générale*, 3^e éd., Paris, 1884; André Grégoire, *Nouvelle histoire de France*, cours supérieur, nouvelle édition, Paris, 1884; H. Pigeonneau, *Petite histoire de France*, nouvelle édition, Paris, 1873; A. Magin et L. Grégoire, *Histoire de France*, nouvelle édition, 4^e éd., Paris, 1877; G. Ducoudray, *Histoire élémentaire de la France*, cours moyen, Paris, 1884; G. Bruno, *Le tour de la France par deux enfants*, cours moyen, 326^e éd., Paris, s.d.
- (25) Félix Ansart, *Petite histoire de France*, nouvelle édition, Paris, 1875; Gustave Hubault, *Histoire de France*, cours supérieur, Paris, 1887; E. Wautier d'Halluvin, *Éléments d'histoire universelle*, 3^e éd., Paris, s.d.; F. I. C., *Chronologie de l'histoire de France*, Tour, s.d., 1886?.
- (26) テュヌマンイの女子中等教科書及び女子雑誌。G. Ducoudray, *Histoire nationale et notions sommaires d'histoire générale*, première année, Paris, 1887, pp. 23, 36-40.
- (27) フランシエの女子中等教科書及び女子雑誌。D. Blanchet, *Histoire nationale et notions sommaires d'histoire générale*, première année, Paris, 1888, pp. 23-26.
- (28) Bosc et Bonnemère, *op. cit.*, p. V; Gérard, *op. cit.*, pp. 363-364.

- (36) フェルナン・ブローデルも、独立期ガリアの文化を評価する一人であった (Fernand Braudel, *L'identité de la France* t. 2, Paris, 1986, pp. 51-52)。一九八三年には、ファコンとバランがローマ化とキリスト教化によるガリアの文化的宗教的な独自性の喪失を「ガリア人の二重の死」と捉え、二〇〇四年にもジャーナリストのピエール・ランスが、ガリア人は独自の文明を持っており、アレシアの敗北によって失ったく別の道を歩まざるを得なかったと主張している (Facon et Parent *op. cit.*, pp. 222-225; Pierre Lance, *Alsia, un choc de civilisation*, Paris, 2004)。
- (37) 同上 Jean Lecuir, “Enquête, les héros de l'histoire de France”, *L'Histoire*, no. 33, avril 1981, pp. 102-112; J.-P. Albert, “Pourquoi les héros nationaux sont-ils souvent des vaincus ?”, in P. Cabanel et P. Laborie dir., *Penser la défaite*, Paris, 2002, p. 23; Denise et Pierre Cogny, “La «rhétorique» d'Asterix le Gaulois”, in Paul Villaneix et Jean Ehrard dir., *op. cit.*; Daniel Pageaux, “De l'imagerie culturelle au mythe politique, Asterix le Gaulois”, in *Ibid.*; E. Melnoux et D. Mizimacker, *100 personnages qui ont fait l'histoire de France*, Breal, 2004, pp. 6-7, 25; J.-P. Albert, “Du martyr à la star”, in Centlivres, Fabre, Zonabend dir., *op. cit.*, p. 11.
- (38) *Vercingétorix et Alésia*, p. 11.
- (39) François Durpaire, *Enseignement de l'histoire et diversité culturelle, «Nos ancêtres ne sont pas les Gaulois»*, Paris, 2002.